

クリスタ・ヴォルフ „Leibhaftig“ における身体と社会の問題

落合直子

クリスタ・ヴォルフの „Leibhaftig“ (2002) は „Medea Stimmen“ (1996) に続く作品であるが、1988年から1989年にかけて旧東ドイツの病院で、虫垂穿孔と合併症で生死の間をさまよった自分自身の入院体験がもとになっている。出版当時の書評では、自伝的要素の強い作品であり、瀕死の主人公の肉体と崩壊しつつあった旧東ドイツの社会状況に平行性を見るものが大半である。ヴォルフは、名前のない女性の映画製作者を主人公としていて、彼女の独白によって自分の病状の進展と治癒の過程が語られることが物語の筋となっている。そのなかで、彼女は旧東ドイツの党幹部で、自分たちが25年交際を絶っていた人物を想起する。彼女の病状は悪化の一途をたどるが、この党幹部が政治体制の急変によって自殺した報せをうけて奇跡的に病状が回復する。

本作品はこれまでのヴォルフ作品と同様、主観と記憶を交互に往還させた作品である。過去に見られたような、主人公の身体に出現する病気が社会の矛盾を暗示する装置の役割から、病気におかされた身体描写に力点がおかれる。身体状況の描写の特長として、二つの方法がとられている。一つは身体を知覚レベルで拡大把握された状況が述べられるが、特に苦痛の描写には運動性を属性とする水の隠喩が使われる。これは人生と水との相似性や、水から血液への連想の発展や、身体の水の隠喩のなかに、病気と健康、善と悪とが遭遇する状況を描くものである。もう一つは語りの主人公について、想起や省察など能動的な意識である ‚ich‘ と病院内で管理される受動的な肉体である主人公の ‚sie‘ と ‚die Patientin‘ という一人称と三人称とに分離させたことである。メルロ・ポンティの『知覚の現象学』では、意識の部分において、意識の保持は疾病の影響を受ける可能性があるとするが、ヴォルフの試みは人称代名詞の転換によって物語のパースペクティブを変え、肉体部分の切り離しによって記憶と対決する主体の意識の変質を防ぎ、主人公の内面世界と外面世界とを視覚的に区別する機能を担っている。この一人称と三人称の並存は、主観と客観とが対比される構造になり、同時に、主人公たちの芸術の創作理念とそれを精神的に抑圧する党の文化指導者の指導が主観と客観の対比で暗示される。そこから主人公と行動の自由のないロマン派女性文学者との重なりが連想される。

ヴォルフの病気観では、我々が個人や社会のレベルで自分たちを欺き、また欺かれている習慣と病気とが関連があるとしていて、病気の根源を構造的と見る。彼女は暗示や夢によって、全体主義や、ユダヤ人迫害など、歴史的な自己欺瞞の問題へ誘導している。